すので、すべてが書生風で謂ゆるザックバラン過ぎるため、如何にも禮儀をわきまへぬやうに見えたり、時には遠慮のないことが姑などを馬鹿にしたやうに思はれたりするのであります。嚴格な家庭に育つた人は、かうした事はありませんが、たゞ學校だけは充分濟ませても、家庭の教育といふことに少しも注意しない娘さんには事實かうした人も多いと思ひます。

人に依つては此方で仕込むから、その儘で結構だなどゝ言つて、學校を出たての嫁さんを貰ふ方もありますが、これはどうも結果が宜しくないやうであります。何故と申しますと、貰つた方ではそれ程でないと思つてゐたのが、案外物を知らなさ過ぎたりして、いろ〳〵な缺點を發見して失望する例が少くありません。

もう一つは兎角學校を出てゐるお嫁さんは、自分の思ひ通りに何事もしようとします。斯しては良人や姑の氣質、又はその家の家風などを知つて、それに應じてゆくのが嫁の努めでありますが、それを何も彼も自分本位にしたがるために、圓滿を缺いて

しまひます。家政向きの事や、或は子供の育て方などでも、姑が長い間の經驗からかうした方が宜いと言つても、それでは理論に合つてゐませんと云つた工合に、自分の主張を通さうとする嫁がありますが、たとへ理屈に合はないことも、長上の人は相當の經驗をもつてゐるので、そこには一理があるのですから、自分は一歩讓つて先を立てゝあげると云つた考へがなくては折合つてゆかれません。何かと云へば理屈で片附けるために、家の嫁は學問を鼻にかけるなど言はれるやになります。

又兎角學校出のお嫁は我儘者であります。一例を申しますと、女學校出の妻君が、良人が日曜などに稀に家に居るのですから、ゆつくり好きな本でも讀みたいと思つても、妻君は毎日自分は留守ばかりさせられて居るのですから、日曜ぐらゐ遊びに連れて行つてもいゝでせうと言つて引張り出してしまふ。良人がそれを拒めば、自分だけは遊びに出てしまふのです。

それから又、女には誰れにも嫉妬といふことはありますが、これが學校出の者は隨

分露骨なものがあります。殊に今の人は却々悧巧で、單に推量とか想像で嫉くのでなく、計畫的とでも云ひませうか、良人が外で善からぬ行ひのあることを嗅ぎつけると兎に角その證據を洗ひあげやうとする。たとへば金をつかつて私立探偵社に賴むとかして、動かせない證據を握つておいて、ぐつと良人を締めつけて行きます。これ等は到底も頭のない、ぼんくらな者には眞似られないことで、却つて辛辣なものであります。一體嫉くのも程があつて、かういふ妻の態度に出られると色氣がなさ過ぎます。自然良人の方は、自分が惡い事をしてゐても、男の意地から却つて反撥して、そこに面白くない結果が來ます。たとへ妻がこの場合勝利者になつても、結局それで出て行くのでもないとしましたら、變なものが出來上つて、亭主を凹ませはしたが、自分の引ッ込みがつかなくなると云つたものですが、嫉妬もかうなつては、良人をよくさせることは出來ません。矢張り夫を愛するならば、反抗的に仕向けずに何處までも眞心をもつて、良人の惡い方面を直させる妻でなければなりません。これらも兎角敎養の

ない女の方がよいと見返へられる一つの原因であります。

可愛がられる嫁と賴母しく思はれる嫁

嫁として良人からも姑からも、可愛がられやうとするには、何よりも無邪氣な信實をもつて盡すといふことが大切であります。僞りのない良心のまゝに態度言葉をもつて接したならば、誰れしもその嫁を憎む理由は見出せないと思ひます。

ノラ式にたゞ人形のやうに、何でも相手の望み次第に自分を仕向けるといふ事も、可愛がられるといふ意味にはなるでせうが、然しそれは全く玩具に過ぎないもので、個性といふものを忘れた場合にのみやり得るものです。愛される資格は、さうした技巧的のものでなくて、その人の眞實、その人の純な天眞爛漫な心でなければなりません。

一體在來の家庭敎育では僞りをいつはりと氣づかずに敎へ過ぎたと思ひます。例へ

ば、その場合にそれが正しい事でありましても、そんな事を言つては可けないとか云ふやうにされて、知らず〳〵に所謂方便の嘘言を敎へて平氣で過して來たやうです。それが何時の間にか個性となつて、第二の天性をつくりあげ、厭な事でも正直にイヱス、ノーと言ひ切つてしまふことが出來ないことがあります。その爲めに結婚しても良人や姑などに對して、斯うした氣持から、「ほんとうの良心のまゝの無邪氣さで接することが出來ず、心にも無い事を言つたり、意志に反した事をしたりするため、後日になつて帳尻が合はなくなつて來る結果、ついに愛の破綻を招くことになるのが多いのであります。それで何よりも自分の天眞を現はすことが、何時の場合にも肝腎で、それはつまり誰れも持つてゐる良心のまゝを考へ、行へば宜いのであります。ですから嫁となつても、無暗に遠慮をしてゐないで、例へば食物でも嫌ひなら嫌ひと卒直に言つてしまつた方がいゝと思ひます。それを嫌でも食べなければ可けないと云つた形式的な觀念から、姑の前では我慢して食べ後でそれを好まないことを知つた良人の口

から出たりして、姑が氣を惡くすると云つた例などありますが、つまり總てかうした些細な僞りから、取り返しのつかない事が起つて來ますから、自分の本當の心の底を話した方が圓滿にも行きますし、自分も樂だと思ひます。その場その時の誤まかし主義から、僞りを僞りと思はずしてした事の爲めに、のつびきならぬ破目になつて、自ら繩をなひ自ら縛るやうになります。姑や良人が寛大な心を持つて、然うした嫁の欠點を、惡い芽をつみ、良い芽を育てるといふ風に、仕向けてくれゝば不和は起りませんけれども、さうでない限り、いろ〳〵な災禍を惹き起します。

よく夫婦や嫁姑との小競り合ひのやうなものは、お互の嘘言がつまり積つた結果で下らぬ僞り、正しくない事が遂に取り返しのつかぬことに追ひ込まれてしまふのであります。要するに嫁は、自然にして何の技巧もなく樂々とやつてゆく心持をもつて、素直に良人や姑に當つていつたならば、自分も氣樂であるし、お互の間も面倒なことが惹起されずに濟むと思ひます。所謂氣心の知れないやうな何か腹の底に藏してゐる

やうな態度は、最も可けないことで、さつぱりといはゆる腹の底を洗つてしまつたやうな氣持でやつてゆくやうにしたら、お互の隔てもなくなり、何か言つても氣にかける事もありません。

更らに賴母しく思はれる嫁になるのは、矢張り可愛がられるから出發しなければなりません。それでゐてお腹のしつかりした、何事かの大事な場合にも動じないと云つた、理非判斷の優れた嫁は、賴母しがられるでありませう。それには相當の修養と經驗が必要でせうし、又それを積まねば出來ません。然しながら何うかすると、緊乎した嫁であつても、それが自ら支配するやうになつては駄目であつて、良人は良人、我は我で何處までも立てゝ、その蔭になつて自分は働くと云つた嫁が一番賴母しい嫁として理想であらうと思ひます。

良人の機嫌を良くする工夫

良人の機嫌を損ねないやうにと氣づかう心は女のやさしい心持でありまして、妻として最も大切なことであります。然し、單に機嫌を損ねないやうにと思ふことは消極的なことで、それよりも寧ろどんなにしたら良人を喜ばせ、良人を滿足させ、進んでは良人の足りない處を補ひ、お互に完全な理想に近づいて行かれやうかと考へて修養を怠らないやうに心掛けることが必要なことであります。

良人を喜ばせる第一の事は、良人の心持を自分の心持となし得る程度に、充分良人を理解することだらうと思ひます。それには良人の性質、好き嫌ひは勿論、良人の仕事、又は良人の理想をよく知るやうに努めねばなりません。そして良人に後れないやうに努力が必要であります。昔のやうにたゞ朝から晩まで、臺所にばかり沒頭してゐては、良人の心持どころか子供の云ふことも分らなくなりますから、主婦としては、家庭内の事を上手に處理すると同時に、自分の時間を見出して讀書するとか、人に接して種〻新しい意見を聞くとかして智識を廣め、是非とも夫の總てを知つて理解する

だけの力をつけ、共に成長發達してゆくやうに心掛けねばなりません。更らに進んで理想を申せば、夫を理解するのに止まらず、又良人のよき相談相手となり得るやうに注意しなければならないと思ひます。

良人が妻に何か相談する時、又は意見を求める時には、充分良人の相談對手となり得るやうに、又相當傾聽に價する意見も言へる位に平生から修養しておきたいものだと思ひます。

嫁入つてからの嫁の心掛くべき事は、この外まだ多々ある事ですが、まづこれ等の事を結婚前に修養しておけば、所謂申分のない嫁となり得るのであります。以上は永井次代氏、三宅花圃氏、宮田多賀子氏、長松菅子氏などの談話で主婦の友掲載の一節を拔萃したものであります。

緣談に關する傳說

『緣は異なもの味なもの』と俚諺にもある通り、全く緣と云ふものは不思議なものであります。他人からは良緣と思はれるやうな緣談でも、結局は纏らないものもあればとまつた際、親類緣者の挨拶に、『此度は不思議な御緣で……』と言ふのも、尤も顏さへ見ずに一緒になつたものが、末始終仲よく添ひ遂げるのがあります。緣談がまな話です。況して交通不便な時代に、不知火の筑紫の女が鬼の住むてふ東の國の男と結婚し——嘗て夢にも見ず、噂にも聞いたことのない男女が、偕老の契を結ぶなどといふことは、如何にしても人間の業とは思はれず、人間以上の神なり佛なりが、導き助けてくれるのであるといふ考へを起すのも當然であります。

古事記の中にある伊邪那岐命と伊邪那美命とが、天の御柱を行廻り逢つたといふ神事を、婚姻の例に引くことは、如何にも畏れ多いことではありますが、兎に角遠い太古の時代から、婚姻を全く神佛の啓示と思ひ、夫婦の緣は、神が結ぶものと信じてをつたのは、明かなことであります。

出雲の大神が、縁結びの神様であることは誰でも知つてゐられるでありませうが、どうして出雲の大神が、縁結びの神様となられたかを知つてゐる人は少いやうであります。これを先づお話いたします。

昔から男女の縁は、神様が結ぶのであるといふ考へから、種々の傳説が起り、それが因となつて、年々の十月には國中の產土の神々が出雲の大社に集ひ給ひて、自分の管轄下にある未婚の男女を、出雲の大神の前に披露し、神々が評議してその縁を結ぶといふ、神話的の傳説が起つて、遂には出雲の神を結ぶの神といふやうになつたのださうです。

その他、婚姻が神々の結ぶものであると信じられるやうになつた結果、各地方には昔から種々の婚姻に關する神事や傳説や、迷信が行はれるやうになりました。

香取鹿島で知られてゐる茨城縣鹿島郡の鹿島神宮に於ては、昔から正月の十四日に常陸帶の契といつて、男女の縁を卜定する神事がありましたが、これはその當日、

參詣の男女が布の帶に自分の名と、自分の想ふ人の名とを紙に記し、それを紙撚としたのを入れて、神前に供へ、參拜の後に東方の玉垣に向つて、その紙撚を左手の二本指を以て廻して結ぶと、神意に叶ふものは、その二本の紙撚が結ばれるけれども、神意に叶はないものは結べないので、それが結べると否とによつて緣不緣を卜したものであります。

今までも、男女が寄り集つたときなどに、それ〴〵の名前を紙に書いて紙撚とし、その端を結び合つて喜ぶ、『緣結び』といふ遊びごとがありますが、それはこの常陸帶の契の神事から起つたものであります。

山城國の大原の雜喉寢や、大和の十津川の雜喉寢のことは暫く措き、上方の或る地方には、雜喉寢といふ緣結びの一つの風習がありました。これは村に雜喉寢堂といふ堂があつて、毎年年越の夜になると、村中の未婚の男女が、この堂に行つて籠ります。これを雜喉寢といつて、その夜契つたものが、夫婦となるといふ風習でありました。

これは全く夫婦の縁が、結ぶの神の引合せであるといふ考へから行はれたものでありました。然し、この様な縁結びの風習によつては、どうもその結果が面白くありませんので、その後この事はなくなりましたが、年越の夜この堂に籠ると、安産が出來ると言はれるやうになり、女ばかりが籠る風習となつたさうであります。

また靜岡在の丸子といふところには、小山の上に小野藥師といふのがありまして、この藥師の、正月初めの縁日に、參詣の男女が、その坂道の曲り道で、双方から打つかり逢ふと、それを縁があると云つて、夫婦になるといふ風習があると言はれて居ります。

その他各地方により、それ〴〵面白い風習や迷信がありますが、縁結びの神様としては、多くは石像や木像の異體を神體として祀つてあつたものです。それは大抵生殖器崇拜から起つたもので、德川時代の中頃から明治初年にかけてはなか〳〵信心者が多かつたものです。それが警察の取締が嚴しいので、今ではその異體が姿を隱してし

まひました。殊に上州、日光附近から奥州地方には盛んに祀られてあつたもので、大谷石の產地で名高い大谷附近には高さ二間にも餘る厖大なものさへ見られたといふことであります。

縁切りの神様と迷信

縁結びの神様があり、從つて種々の風習がある一方には、また縁切りの神様があり幾多の迷信が行はれてをります。

上野不忍池の辨才天や、江の島の辨天様、其の他各地に祀られてある辨天様の前に相思の男女とか、夫婦とかゞ揃つて參詣するか、或は社の前を婚禮のとき乘物を通すと、戀人同志はその間がまづくなり、夫婦ならその縁が裂かれるといふ迷信がありますが、これは辨才天といふ神が、獨身の神であり、人間が婚姻するのを妬むといふところから、さういふ迷信が起つたのでありませう。

また小御嶽神社の前を、婚禮の乘物が通ると、その夫婦の仲がまづくなるとて、こ

の神社の前を通るのを忌むのは、神代のときに大山祇命の姉娘の磐長姫が、天孫瓊々杵命に嫌はれ給ひ、妹の木花開耶姫が、皇妃となりしを恨まれたといふことにより、この磐長姫を祀つてある小御嶽神社の前を通ることを忌むのであります。

その他すべて獨身の神様は、縁切りの神様とされてをります。

各地方には、これ等の縁切りの神様が數多祀られてをり、また種々の迷信が行はれてをりますが、東京近邊では板橋の『縁切り榎』が昔から有名であり、この榎の皮を貰つて來て、そつと相手に飲ませれば、きつと縁が切れ、効顯いやちこであると言はれてをります。この榎は木曾街道の道傍にありますので、和宮様の御降嫁の際は木曾街道を下つて來られましたが、この榎の下を通ることを避けられて、榎のあるズッと手前から道を外れて、或る大名家敷内に道を取り、且つ榎の見えないやうにと、その大木を全部苞で包んでしまつたといふくらゐに、その時代には、その榎に威力があつたものであります。

この縁切り榎の由來は享保二年、富士山の北口を開かれた身錄といふ行者が、富士浅間を信仰して、富士の北口を開くといふ心願を立て、この榎の下に三七二十一日の祈願を籠め、この木の下で妻子と別れたといふことで、そのとき身錄は、自分等の如き善縁は決してその縁を絶えず、もろ〳〵の惡縁を絶つてくれるやうにと祈願を籠められたといふことであります。またこの境内には、獨身の神で、衆惡大罪を祓ひ盡す神である速佐須良姫を祀つてあつたので、いつしか『縁切り榎』と言はれるやうになつたのでありませうが、實は身錄の心願したやうに、善縁は絶たず、惡縁を絶つといふので、妾との縁を切らせるとか、情夫との縁を切らせるとか、その他すべての惡縁を絶つといふのが本當で、夫婦などの善縁は決して絶つものではないと云ふのですが今でもこの前を、婚禮の乘物を通すことを忌む人があるそうであります。この榎は既に千年餘も經つたさうで、枯れて樹幹のみが殘り、中は空洞になつてをりますが、七五三縄を廻らした老木は、さすがに由諸あることを思はせます。

また新宿の先の淀橋は、昔から花嫁がこの橋を渡ると、縁が切れると云つて、こゝを渡らないといふ迷信がありました。これには種々の傳說がありますが、その一つによれば、應永年間に中野の或る長者の娘が、縁談のことから、この川へ身投げしたので、それより花嫁が此處を通ると、縁起が凶いと云つて、渡らなくなつたのださうですが、今から十餘年前に中野の豪家淺田といふ人が、この橋を架け替へて、同家の主人の花嫁さんが初めてこの橋を渡つてから、そんな風習もなくなつたやうであります

縁談に關する縁起と占ひ

一生一度の結婚です。その縁談が吉いのか凶いのか、箸一本倒れたのをも氣にするのは尤もであります。文明開化の西洋にも、縁談に關する種々な迷信が行はれてゐるのですから、これが東西を通じた人情なのでありませう。

よく四ツ葉のクローバを見付けると、思ひが叶ふと云はれ、若い娘さんなどは懸命に草を分けて探すものですが、なか〳〵見つかりません。この四ツ葉のクローバは西

洋では秘密の望みが叶ふと云はれ、從つてこれを巧く見つけると、戀人との望みが叶ふとか、縁談が調ふとかいふのであります。またこの四ツ葉のクローバを、女がその靴につけると、早く愛人に逢へるなどゝも云はれます。また電柱とその支柱との間を戀人同志が一緒に潜ると二人の縁が切れるとか、或は御飯を食べてゐるときに、娘さんがその座席を變へるやうなことをすると、必ず結婚してから離縁になるなどゝ云ふことが、町家の人達に言はれてゐます。

また昔から櫛を貰つたり、拾つたりすることを忌んで、決してこれを貰ふことをせず、五錢でも十錢でも先方にとつてもらつて、買ふやうな形式にしたり、また往來で見つけたとて、決してそれを拾はないのは、苦を貰ふとか、苦を拾ふとか云つて、これを貰つたり拾つたりすると、必ず縁が切れるといふのでありますが、こんな事から櫛屋さんでも、眞向から櫛屋とは言はずに、九と四で十三になりますから、十三屋と云ふやうな粋な屋號をつけてゐる店もあるくらゐであります。

この櫛と同じやうに、貰つても必ずお錢を幾らか出して、買ふやうな形式をとるのが、西洋の緣起かつぎにもあるのです。それは、愛人からの贈物として、または約婚の印として、ネクタイピンやブローチ、ナイフ等の先の尖つたものを贈られたら、その儘貰はずに、幾らか出して買ふ形式で貰はないと、二人の緣が切れると云ふのであります。これは愛の表象が飾りに鋭すぎるので、愛を眞二つに絕ち切つてしまふといふ考へからです。從つて結婚の贈物として指環が一般に用ひられますのは、指環は圓くて終末がない、即ち限りない愛を示すからであります。然し、それに付けた寶石によつて、吉とも不吉ともなるもので、眞珠は涙の表象なので、婚約の贈物には不吉とされてゐます。一番よいのは輝きある愛と幸福、繁榮とを表象するダイヤモンドださうです。また寶石の色も、非常に意味あるもので、グリーンの色は、仙女の色とされて、婚姻の日にこの色の寶石をつけると、仙女の妬を受けるといふので不吉とされて居ります。その他の色は何でも構ひませんが、殊にサフアイヤかトルコ玉のやうな藍

色のものが、愛の表象として喜ばれてゐます。また寶石を贈るには、相手の生れ月を表象するのが、互に心が渝らないといふ意味を表すのださうであります。

その他西洋には、燕が頭越しに飛ぶと、早く運のよい結婚をする吉兆だとか、男女が二人で歩いてゐるときに、黑猫か白馬に出會ふと幸福の吉兆だとか、娘が愛人のことを思つてゐるときに、鷄の鳴くのを聞くと、その人と幸福な結婚が出來るとか、愛を感じてゐる娘が、二階で偶然に轉ぶと、その年のうちに思ひが叶つて結婚するとか、また階段で、戀人同志が摺れ違ふか、或はキッスをすると破約になるので、一人が階段を下りるか上るかするまで、他の一人は必ず待つてゐねばならぬと言はれて居ります。また戀人同志が二人揃つて寫眞を撮ると、破約になるとか、二人が硝子戸を通して三日月を見るか、或は二人が一緒に鏡に姿をうつすと、二人の間に誤解が起るなど、種々の事が言はれてをります。

また緣談占ひには、こんなのがあります。林檎の皮を途切れないやうに丹念に剝い

て、剝き終りましたら直にナイフを以て頭越しに後方へ投げやり、地面へ落ちる瞬間に、その林檎の皮の形がＡＢＣ……のアルファベットの、どの字に見えるか、その見られたＡなりＢなりが、將來を契る良人の頭字であるといふのです。簡單な占ひ法ではありませんか。

また歐洲の或る地方では、村の娘さんのうち誰が一番早く結婚するかを占ふ法に、こんな面白いものがあります。それは納屋の床の上に、各自の指環をおいて、その上に指環の見えなくなるまで米を撒き散し、更に藁を少しかけておいて、合圖をすると同時に雄鷄を一羽放して米を啄ましめ、かくして一番早く指環の上の米が啄まれ、ほじくり出された。その指環の主が一番早く結婚すると云ふのであります。

また春夏秋冬に、それ〴〵一番早く咲く花を見つけた日が、水曜日であれば、早く結婚が出來るといふやうな事も言はれて居ります。

こんな事もつまらないと言へばそれ切り、効果があると思つてやつてゐる人は眞劍

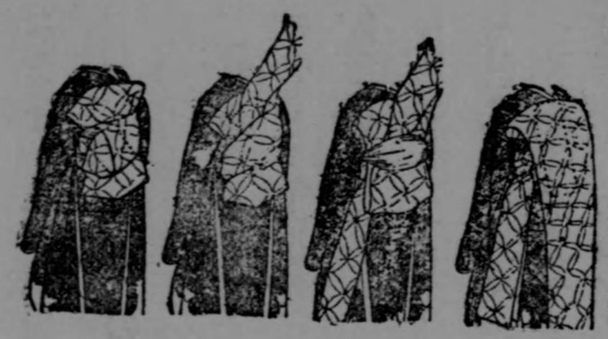
なんですから、一概には馬鹿には出來ぬものでありませう

帶の結び方

帶の結び方を述べる前に注意したいことは、裾模樣のお召のおはし折の事ですが、肩揚のある年恰好のお孃樣の方は、裾模樣がおはし折の下へ全部出てしまふ程の眷を持つて居られません。そこへ着物の丈が長いので、模樣の頭をすつかりおはし折の中へ入れてしまつて、平氣でゐられる方が澤山あるやうですが、それは誠に心無い着つけであります。そんな時には、澤山のおはし折を全部下へさげてしまはないで、一つでも模樣の出るやう、おはし折を上げて、伊達卷で押へるのであります。すると一寸のことで誠に合褄のところが床しくまゐります。又帶がずり落ちるやうでしたら後のおはし折の上、伊達卷の下へ脊負揚を入れると宜しうございます。

も一つ注意したい事は、晴れ着の帶でしたら、大抵織物ですが、それに若し鳥とか

樹木とか、花物など、すべて生物が織り出されてありましたら、それが逆さにならぬやうに注意して締める工夫をせねばなりませぬ。すべて帶はどんな場合でも、模樣を生かすといふ事を、第一の條件として考へねばなりません。



島田にうつる帶の結び方

最初手は普通のお太鼓より長目にして、二重廻し、垂れをズッと引き出して堅く締めます。次に垂れを下げて、お太鼓のやうに脊負揚をします。その時結び目のくしやくしやしたところは二三寸ぐらゐは犧牲にして、脊負揚の下へ入れ込むやうにし、上側になる方へ巾着襞を寄せ、高く脊負揚を脊負つて、堅く前で結びます。そしてワナになつてゐる方と手とでお太鼓のやうに結んでワナを左の肩へ、ズッと高く出し、手を右の肩の方へ引き出します。

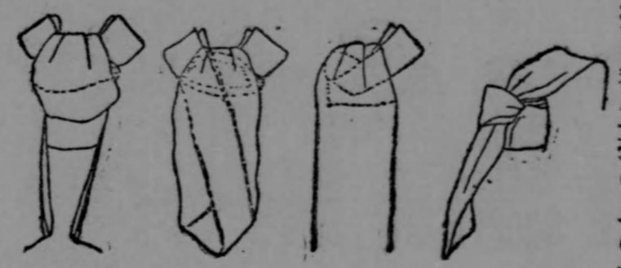
引き出した手は、圖中にある點線のやうに擴げて、お太鼓の中へ入れますと、出來上るのであります。すべて帶は脊負揚をしたときに、垂れた二枚がきちんと合ひませんと、見た眼が惡いばかりでなく、ぢき崩れて來るものですから、脊負揚をする時注意して能く揃へるやうに致します。

令嬢向の結び方

最初手を普通の立矢の字くらゐにして、前にはセルロイドの帶心を入れ、二重廻してきゆつと結びます。そして圖中點線に示すやうな厚紙（幅二寸、長さ一尺二寸で板目紙か古いワイシャツのカフスが宜しいでせう）を心に挾み、垂れを上に持つて行つて脊負揚をします。若し大變長いやうでしたら立矢を二つ重ねてします。それから手を脊負揚の上から持つていつて、圖中點線で示すやうに、矢の字の裏側の方へ隱し

結び目の中へ押込んでおきます。又もう少し手の長いときは手の先を矢の字の左側へ擴げて出しても宜しいです。

次に脊負揚の上の方へ出してあつた垂れを二つに折つて、その先を圖中點線で示すやうに手の下に入れ込んでしまひますと出來上るのであります。



洋髪に似合ふ結び方

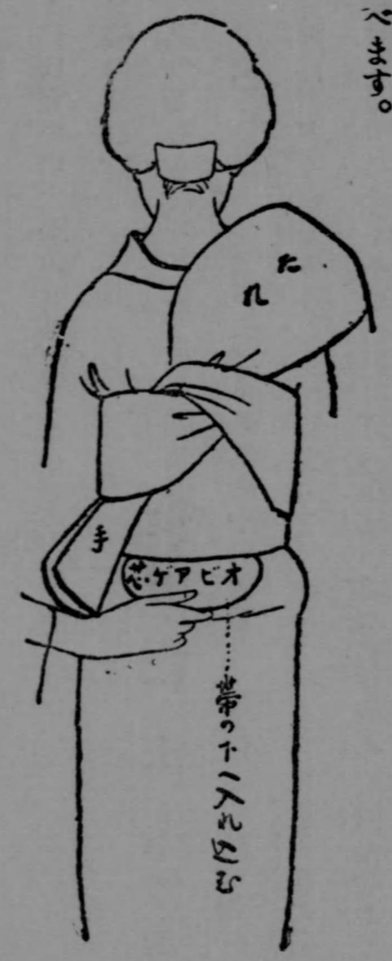
圖で示すA圖は、どの結び方にもある順序の一つです。垂れもすつかり引き出します。手は普通のお太鼓の長さで宜しい。B圖の點線で示すやうに、手を二つに折り、二枚になつた方を脊縫ひの方へ行くやうに、垂れの下から肩へ持つて行きます。C圖にある點線のやうに、矢張り垂れの先は二つに折つて、手の先と向き合ふやうに、二枚の方を脊縫ひの方へ

向けて、左の肩の方の持つてゆき、お太鼓の方には巾着襞を拵へ、脊負揚をします。かうしますと帶は、どうしても下で一つ捻れます。その捻れたところを、上の方へたくし上げていつて、お太鼓の中へ入れるやうにし、お太鼓の下に垂れになるところを二枚にして、D圖のやうに結びます。點線は中に折り疊まれたきれを示すものであります。斯うしますと先程上へたくし上げた捻れたところがお太鼓の中に入つて、丁度お太鼓のふくらみをつける役を受持つてくれます。これで全體の形を整へて帶留めをすれば宜いのであります。

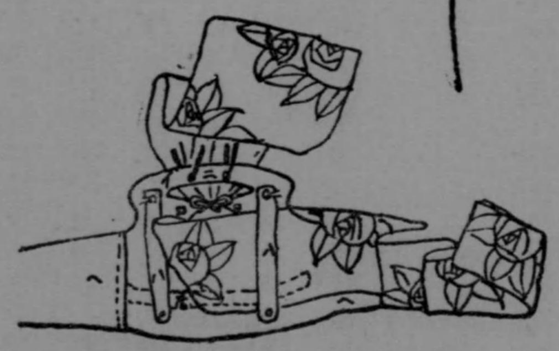
夏帶の結び方

肥つてゐられる方は、どうしても餘り細い帶や、派手に結んだ帶は似合ひませんから、斯ういふ方違は、矢張り名古屋や單衣帶などを用ゐられた方が宜しい。肥つてゐる方は、どうしてもゐしきが目立ちますから、かうした單衣帶の薄手のものは、腰の所で帶の下へ極く小さい帶揚げ心か薄い腰蒲團を作つて挾んでおくと大變恰好よく結

べます。

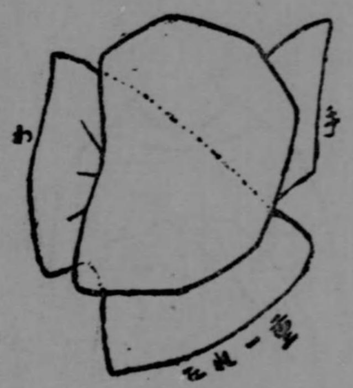


〔小幅帶〕はこれは誰れもがいつもするやうに後で垂れと手を結びます場合に垂れの方は、垂れ先を少し殘して輪に引きぬきます。そこで手の結び目際を毎時のやうに少し胴へ卷いた部分の中へ押し込むやうにして皺を取りお太鼓のやうに垂れと手を結び合せて、兩方の先をピン



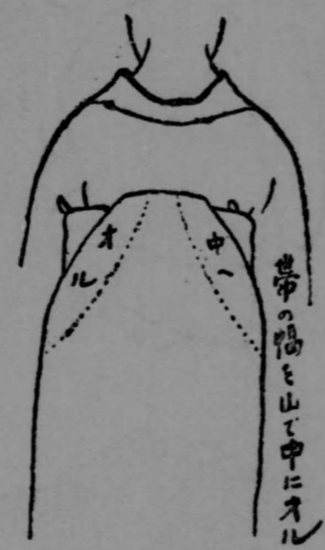
と結び目の外へ引き出し、結び目の形をつけたところで垂の輪になつてゐる先に、一つ一寸襞をつけます（第四圖參照）と、隅が何となく廣く見えますので恰好がよくて宜しい。

〔名古屋帶〕　名古屋帶は垂れにする方が普通の帶に比して大分短かい爲めに結び目を二重にすることが困難であります。その爲めにどうも腰の邊りの形が惡くなりますから、お太鼓にする時は、垂先を殘して、垂れを輪に引きぬきます。そしてこの輪の中手を通してお太鼓の形をつけますとズッと確乎と氣持よく結



べます。併しこれは餘程恰好が地味になりますから、奥様向きとでも申しませうか。

今孃向のお太鼓、これは悉皆垂れを引き拔いて結びます。次に帶揚げ心をつけます時に、帶幅の左右を二寸位づゝぴつちり中へ折り込んで、帶揚げを恰度よい高さに脊につけます。



後は普通のお太鼓に結び、下の方は帶幅一杯に擴げておきます。左右には涙手に見せるために角を出しておきます。これは葉やかで厭味のない上品な結びあげが、堪らなく後姿を美しく見せます。

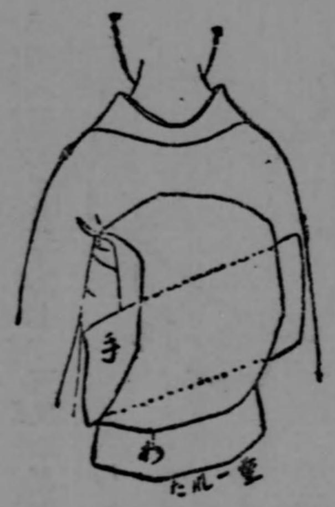
帶止めは、どの結び方にしましても正面は稍斜めにかけ、この結び目なり金物は斜

めの下つた方にしても身體の正面より幾分横に見せた方が宜しい。高さは前の帶幅の半分より下になる位が頃合の形でせう。

短い帶で結ぶお太鼓

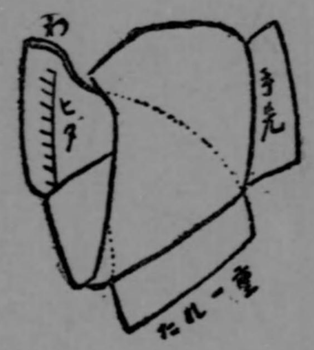
これにはセルロイドで出來たお太鼓結びの帶形といふのを用ゐます。この帶形を用ゐますと、帶の長さは從來の半分、つまり五尺乃至極く肥つた方で五尺五寸であれば充分好い恰好に結べます。

圖の如く網目になつてゐるところが即ち帶形です。又圖中の點線になつてゐるところは裏についた垂れで止め、(ハ)は前帶を動かぬやうに止めるニツケル板、(へ)は帶形を身體にぴつたりと結び附ける紐です。



これを使ひますには五尺の帶ならば、手とする方を幅二つに折つて帶形の上部の孔へ裏側か

ら表へ通して抜き出し、三尺ほど手を引き出します。さうして紐でそこを堅く結んでしまひます。それから手の方を横に折り曲げて、ニッケル板で押へ（上のホックを廻して外します）次に紐のあるところへ揚げを當て紐で緊乎縛ります。そして普通のお太鼓を結ぶやうに、脊負揚で上の形を整へて裏返し、圖中の點線（裏側に、横に渡してあるセルロイドへ、垂れを挾み、よい恰好にお太鼓の形を拵へます。さうしたものを脊中に當て（へ）の紐を前で結び、脊負揚も前で結びます。



次に三尺引き出した手を前に廻して（へ）の紐や、脊負揚を隠して、手の先を後のお太鼓の中にくゞらせますと、後から見たところ出來上り圖のやうで、少しも普通のお太鼓と變りがないばかりか、却つて身體の線にぴつたり合つて、氣持がよく姿勢もしやんと致します。

八千代結び

最初手を二尺ばかりとりまして、二卷胴に卷きます。そして手を上にあげるやうにして、後で撚つておきます。それから掛けの先を幅五つに折り、細い紐か元結で先から五寸位入つたところ　結び、先を末廣のやうに開き、この末廣を中に疊み込んで、中央を襞をよせて紐でくゝり、末廣を上へ引出して置きます。

それから手を二つ折りの儘下へさげて、下から上へとこれを三つ折りにしてお立てのくゝり目へわたし、末廣の下を通して

三つ折りの一番下の方になつてゐる部分に下から上へ引出して通して、ギュッと引き緊めます。そして此掛けと三つ折りの間に脊負揚を通し、手のわたしてあります上部のところを襞を作らずに山形にして、末廣の出てゐる方は全部上へあげ、紐を前に廻し、一方の手の出てゐる方は、手を成るべく上になる樣にして、手と三つ折との境に負揚げ紐がわたるやうにします。帶止めは手の下の方に襞のないやうにキチンと輻をして固く結びます。

彌生結び

これは普通に結び目にする方を二尺五寸ばかりとつて手にし、矢張り前と同樣にして上へあげて置きましたら、この手を中央二三寸の輻にして、兩端を合せて全體で丁度帶の半輻くらゐにします。そしてこれを五寸くらゐの垂れにして、後を輪にし、お太鼓に結ぶ時のやうにして撚つたところの上に紐で締め、垂れを開きます。(先圖參照)

掛けは先を前のやうに末廣にして三つに疊み、中央をくゝり、末廣を下へ出し、手

でこしらへた輪の中にこれを通し、兩端を同じくらゐの寸法にして輪で中央をキュッと締め、三つ折の下側輪へ帶揚を通し、帶の最初の撚り目を帶揚げ臺として載せて固く締め、帶止は輪の下の方へ入れて輻を擴げ、それと共に垂れの兩端を少し上げ目にして結びます。

兩端は同じ蝶々のやうに上あがりにしますとキリッとして恰好のよいものであります。

髪の結ひ方

髪かたちと云つて婦人の容姿の最も美くも醜くも見えるのは髪の風であります。況して髪の風の善惡で其人の品位も大概推はかられるものですから、或るべくおとなしく結んで、常に亂さぬ樣に心懸けねばなりませぬ。

髪の結ひぶりは、人によつて一概にどんな髷が似合ふかは言ひ難いですが、先づ脊

が高くて痩肉な人は、髪を鬢髪ともに普通よりは少し大きく出し、髷は成るたけ根を低くとり、高くならぬ様の結ひ方を宜しとします。これを反對に根を高く髷の尻を高くすれば、愈よ脊高く痩こけたのが目立つて容色を下げるものであります。又脊が低く肥つた人は、鬢髪とも餘り出さずして、髷は成るべく高きが恰好が宜し。然うかと云つて餘り引詰め、鬢髪の出ないのは宜しくありません。

丸顔や平顔に鬢のない束髪などは、頬の脹れの目立つて宜しくありません。總て髪はどんな顔に限らず、餘り根の高過ぎるよりも低いのを宜しとします。それは何故かと云ひますと、鬢のふくらかで左右の耳の下に鬢裏の見えるのは貌のうつりの善いものであります。

前髪の取り様にも時々の流行があつて、明治の初年頃には、額の正面は細く〇のやうな分け方で、髪の薄い人は蚊蜻蛉の宿つて居るかと思ふやうなのがありましたが、其後追々に大きく上に擴がつて、凸のやうな形にとることが流行する様になりました

これも又其貌によつて區別のあるのを知らず、流行と云へば誰れも彼れも皆眞似るのは宜しくありません。これも人毎に異なるもので、面長の人は小鬢からかけて薄平たく〇のやうな形にとつた方が面のうつりがよく、丸顔には少し細長にとり、ゆたかに高く立てゝ結へば、大いに容貌よく見えるものであります。凸額の人は前髪を十分前へ突出し、少しでも其の凸額の目立たぬ様にします。これと反對に、俗に猫額の人は成るべく後方へ引詰めて、額の廣く見える様に工夫します。

そして髪の結ひ方の種類はと申しますと、丸髷、唐人まげ、割からこ、天神まげ、三つ輪、おさふね、櫛まき、達摩返し、島田崩し、おばこ、おか本結、松葉返し、結わた、島田潰し、兵庫結び、竪兵庫、おしやこ、なげ島田、たかまげ（一名高島田）島田、下げ髪、片はづし等で、小娘の髪には蝶々髷、銀杏返し、立唐人髷、おたばこばん、稚兒輪、かづらしたなどあります。

その中で丸髷と島田髷は、時につれ其の形狀が少し變ることもありますが、廢れる

やうのことはなくて豆面目な結び方であります。妙齢の處女が結婚する時結ぶ髪は、この島田を用ゐます。

婦人の髪を結ふに用ふる諸器械は、あら櫛、中ぐし、すきぐし、けすじ棒、黒元結、白元結、すき油、びん付油、かもじ、たぼさし、たぼどめ、髷入れ、ばらみの、びんさし、びんみの、はりがみ、鋏、剃刀、けぬき等であります。

◉島田まげ

島田髷を結ふには、先づ鋏で元結を切り、かもじを取つておき、次にあら櫛で左右の鬢の毛をとかし、次に髢の毛を漸次にとかし、再び中櫛で左右の鬢及びたぼの毛を丁寧に梳きあげ、小布を微温湯にひたし、それで毛をもみ癖を直し、水油を滴して毛になすりつけ、又すき櫛で能く梳きあげた上はり紙を製へます。

はり紙は紺土佐紙を程よき形に切つて、鬢附油を塗るのであります。次にかもじを用ふる者は先づこれをとかします。其時にはあら櫛、中櫛等で能く梳き、水油を附け

てとかすのであります。次に又髢さしをとかし、そして毛すじ棒で前髪をかき分け、黒元結で結びます。前髪の幅は各その人の思ひ〳〵ですが、大抵は一寸ほどが宜しいでせう、又小前髪を掻き分け、前掻の毛と共に結びつけます。これを結び終りましたら中櫛で両鬢を程よく掻き上げ、假りに紙を引裂いて結んで置き、次にけしの毛と云つて眞中の毛をとかし、前にとかして置いたかもじを入れ、元結で結び、次にたぼの毛をとかし、前のたぼさしを入れ、白元結でけしの毛に結んでおき、兩鬢の紙の結びを解き、能く流いて毛を揃へ、けしの毛に結びつけ、又前髪をとつてけしの毛に結びつけ、けしの所を根とするのであります。そして白元結二本を合せ、根を堅く結んでおき、根がけをかけ、根を握つて能くとかし毛をそろへ次に髷の大小を見計ひ、毛すじ棒で毛を先から三つに折返し、工合を見て紙をつけ、再び折つて毛筋棒で髷の上を掻き撫で能

く毛を揃へ、次にかりに根より元結をかけて髷を結び、そして毛筋棒に鬢附油をつけて前の髷と後の髷を搔き、元結でかせをかけます。かせは元結を前の髷から入れて根の後で結び、そして先に根を結んでおいた二本の元結で髷を結ひ、前の假りの元結を切り捨て、毛筋棒で前後を搔き、毛筋を揃へてこれで出來上つたのであります。

◆まる髷

まる髷を結ふには、先づ鋏で元結を切り、兩鬢のたぼとけしの毛をとかすことは島田と同樣であります。前髮を結つた後けしの毛を結ひて根をこしらへて置き、次にたぼさしを入れてたぼを拵へ、根を結びつけ、次に兩鬢をとかし、程よく根に結びつけ、根を握つて能く梳いた後、元結で毛の中ほどを結びその結つた所から毛先を二つに分けて手柄を附けます。手柄は布を卷いて作り、又は毛のみで作ることもあります。かくして元結で其の手柄の根の所を結んで置き、毛筋棒をもつて折り返し、髷入れを入れ、中ざしを刺し、前に假りに結んだ元結を根のうしろに廻して結びつけ、更に前か

ら元結をかけて根の後で結び、假りの元結を切捨て、毛筋棒で能く髷を搔き、毛筋を通し、又前後を搔き撫で、光澤のある樣に結ふのであります。

◆束髮

近頃束髮には色々と考案されて嶄新なものがありますが、これが束髮の便利といふのは、束ねることの容易なると、その保ちの長いと、鬢つけで頭の上を塞ぎ、毛穴の蒸發を止めることのなき故、衛生に宜しいのと、後にたぼを長く出しませんから、首を前の方へ屈めるの憂がないといふ點から流行して居ります。

◆春向の髮

髷を基調としないで、たゞ長いものが束ねられたと云ふ感じを出した髮の結ひ方—

—要は日本髪でも洋髪でも、ふわりと結ばれたものでなくては春向きにはなりません。髪の形は顔の側面を鏡に寫して見て、顎の先から耳に線を引いたとして、その線の延長が、もう頭を通り過ぎやうといふところに出來る一點、そこを髷の最高の點とした髪形が宜しい。

この結ひ方は左右に耳隠しの毛をとります。そして兩耳に、ちよつと三本鏝をかけて毛をふくらませて置き、前も生え際に一寸鏝をかけて額の輪廓をとり、全部の毛を一纒めにして下の方で結びます。その上でまた耳隠しの毛なり、前髪なりを顔にうつるやうに指先で毛を引張り出して形をつけます。髷はたゞ周圍の毛に釣り合せて、殘つた毛を束ねておきます。丁度昔の人がおぼこに結ぶときのやうに、左の手に毛を一卷して、殘つた毛を根にぐる〳〵卷き、左の手を抜いて、ピンで止めておくのみであります。すき毛は何處にも

入れません。

◈ 夏向の髪

これは唯顔に合せて小ぢんまりと結ぶのであります。形は極く無造作なのが宜しいが、併し無造作なだけでは髪もぺしやんこで趣がありません から、一旦髪全體に鏝で形なり、ふくらみなりを附けておいて、無造作に結び上げた感じが宜しいのであります。

この髪には矢張り分け方も何もありません。たゞ前の方を七三にして、兩方へ一寸おきぐらゐの波をこしらへ、それをよく櫛で梳かして、皆一時にくゝります。さうしておいて、生え際のところや耳のところは、手で自由に引張り出して形をつけます。そして少しふくらみを持たせたい所々にはすき毛を思ひの儘丸めて入れ込みます。次に髷ですが、髪

をよく個いて二三度捻り、くる〳〵と巻いて毛先は、たゞ根に巻き込みますだけです。

◆秋向の髪

髪の分け方は、後を少なくし前を七三にします。そして後の毛は二つに割つて、繩を撚るやうに、根になるところで毛をねぢり、ぐる〳〵と堅く巻いてしまつてピンで止めます。

それから七三に分けた左右の毛にマーセルウエーヴのやうな波をつけます、そして兩方の毛先を捻つて、最初縄に撚つた根の毛のところへ持つて行つてピンで止め、毛先は互ひ違ひにぐる〳〵巻いてまたピンで止めておきます。耳の廻りにも前の方にも、すき毛の様なものは少しも入れませんし、逆毛もしません。この様にして輕い簡單な結ひ方をして、時折にブラッシで梳しますと、自然の好い光澤が出ます。

◆冬向の髪

先づ初め圖の様に分けます。そして後は全部一束にして根を少し根上りに結びます。次に前髪を俯いて梳してこれに梳き毛を前髪の中に入れて根で止めます。すると前髪に入れた梳き毛が餘つて出ますから、根の下に重ね合せて、前髪の毛はかもじの毛に揃へてとかし、梳き毛をピンで止めます。梳き毛が髱の上に出てゐて可笑しうございますが、この上へ髷を載せますから隠れますし、また髷もふつくらと致します。

上圖は、根の上の前髪の結び目のところへ、髱を載せたものです。かもじは動かないやうにピンで留め、根の毛と一緒に下の方へ梳して來て、生え下りのところで二つに分け一寸ピンで留め、毛先を上に持つて行つて、また

し毛が短くて毛先が殘りませんでしたら、コブは拵へないでおくか、上へ持つてゆく毛で少し大き目のコブを拵へるかします。

最後に前髪を七三くらゐの見當に、横の方から一寸鏝をかけて、生え際の形をつけますと、どこから見ても可愛らしい束髪になります。

◆若奥様向

最初前の様な恰好に毛を分け、中根をとつて、これも根を少し高目に結びます。そして梳き毛を二つ作つておき、髱の毛を梳かしてその梳き毛の一つを圖の如くに入れて根に止めます、次に前髪を結んで、今一つの梳き毛を入れ耳の後あたりで、前と後中から下の方へ返し、なほ毛が餘りましたら、毛先を捩つて左右兩方へ小さなコブを拵へてところどころをピンで留めて置きます。若

の梳き毛を程よく合せます。この時梳き毛が餘り多いやうでしたら、兩方から拐り取つて程よくします。髷は圖の如く自毛を二つに分け、兩方とも捩ぢて、兩側に三つ位づゝ輪を作つてピンで止め、髱でS巻きの、先をくゞらした形を拵へて其上に載せ、ところ〴〵をピンで止めますと出來上ります。誠に簡單で上品な若奥様向きの束髪であります。前髪には別に鏝を當てず、ふつくりとした儘にします。

髪の養生

◆毛髮には常に日光と空氣を與へねばなりません。

新鮮な空氣、日光は毛髮を美しくする上に大切な榮養なのであります。日蔭に育つた顏色に比し、清い空氣と太陽の惠みを受けた皮膚が艶かであるやうに、毛髮は皮膚の變形でありますから、充分この養ひを受けないと、美髮になりません。

◆毛髮には輕い刺戟を與へねばなりません。

人體の健康を保たせるには、相當の運動が必要であるが如く、丈夫な長い毛髮を育てるには、櫛やブラッシで梳いて、輕い刺戟を與へることが大切であります。

◆マッサージは毛髮を美しく豐富にする。

結髮の時には必ず頭の地肌を充分兩手の拇指、人差指、中指で輕く揉みます。マッサージの時に注意すべき事は、毛を引きつらないやうに、ピッタリと地肌に指頭を當てゝ揉み、それも一日五分間ぐらゐにします。

◆洗髮の前には油を地肌にたつぷりと塗り込んで洗ふと毛切れがせずに垢がとれます

日本髮は油を常に附けますから宜いですが、洋髮は平素油をさう用ゐません爲めに其儘洗髮しますと驚くほど毛がいたんでしまひますから、洗髮の一日前あたりから、たつぷりと水油を地肌に塗りつけて、毛根に榮養を與へてから洗髮いたします。

◆雲脂の多い髮は毎日アルコールを盃一杯入れた熱湯で頭の地肌を拭くと宜しい。

雲脂が多いと其後が禿になつたり拔け毛がしたり、又結ひ上げに雲脂が浮いて決して奇麗に結ひ上げられません。かういふ方はマッサージをしたり、アルコールの混合液で頭を拭くと宜しい。

又レモン汁を絞り、これを薄めて梳き毛か脫脂綿に浸して頭の地肌を拭くのも宜しい。

◆就寢の時は僅かな手數をおしまずに髮を解いてゆるく卷き毛根を休めておくと拔け毛が少なく毛がむれません。

日本髮では到底望めぬ事ですが、人手を借らずに出來る洋髮ならば、就寢前に忘れ

ずにほぐして、先づブラッシで埃を取り、極くゆるく卷いて寢みますと、安眠もとれれば、髮の清潔を保つ事にもなつて拔け毛を防ぐために効果があります。

◈髮油は鑛物性のものは避け植物性のものを選べ。

髮油は如何なる場合でも、鑛物性のものを用ひてはなりません。毛を赤くし、癖毛を生じ、汚れを早めます。植物性の最適のものは椿油であることは、既に定評があります。

◈洗髮の時に毛先を持つて洗ふのは切毛の原因を作る。

多くの方が毛先に液をつけて之をしめして洗ひますが、この結果は毛先が洗ひ過ぎになつて、遂には毛先を次第に切らしてしまひます。

◈結髮の時は必ず前の結ひ上げと分け目をかへること。

常に同じ分け目で髮を結ひますと、その部分の毛根を傷め、分け目の筋がだん〳〵太くなつて禿になることがありますから、注意しなければなりません。

◈毛髮の艶を增す食物を選べ。

毛髮に艶なくバサ〳〵として居りますと、延いては顏色にまで拘つて、美しい肌の冴えは隱されてしまひます。故に海草類、牛乳、胡麻の類の食物は是非必要であります。これは外部から油を塗りつけるのと同時に、內部から榮養を與へて髮の艶を增す上に非常に効果があります。

◈洗髮に水を使ふと禿になる事がある、溫湯を使へ。

夏季になると水で洗ふ方がありますが、垢や油の溶解力がない爲めに、髮洗に無理をして而も充分に淸められません。尙又洗つた後で地肌がほてり、毛根の組織を損ひ易く、これが爲めに禿になることさへあります。

◈癖毛を治すには桑の根の煎汁を用ゐると不思議になほる。

桑は少し大きい藥種屋にあります。これの煎汁にタオルを浸して、毛の上にあてゝ蒸すやうにします。

結婚披露の挨拶（文例）

結婚の披露仕方は前に述べましたが、披露の挨拶を述べて見ませう。

結婚披露の挨拶（父より）

皆様、今日は御多用にも拘らず、御遠路を揃つて御足勞下さいまして眞に感謝の外はございません。

粗酒粗肴で、到底も御口には合はない事と存じますが、どうか御寛ぎの上悠々と召上つて下さる樣お願ひいたします。

今度愚息好夫奴が、皆樣の御引立でやう〳〵某會社に勤め、私達老夫婦も殊の外よろこんで居りました處が、知人が、

『君達夫妻も既に初老の域を跨いだのだから、早く息子に嫁でも貰つて安心してはどうだ』と勸められ、ついぞ其氣になつて居りました處、恰度幸ひに何某氏の媒介で、

某家の令嬢××子と婚約が整ひました樣な次第でございます。

何卒今後私達夫婦と同樣に、宜しくお願ひいたします。甚だ口不調法で、到底も皆樣の御厚意に添ふことは出來ませんが、その邊のところは幾重にも御諒察の程を只管御願ひいたします。

結婚披露の宴に招かれて（友人より）

令息好夫君が、本日華燭の典を擧げられるに就きまして、友人として不肖私までにも御招待を添ふしました事は、深く感謝する次第であります。

聟君好夫君は此程慶大文科の御出身で、しかも級の首席でぶつ通した秀才であれば前途の光明は期して待つべき君であります。尙ほ某會社の信任も厚く、大勢の社友も君を模範として居るとの事であります。

嫁君も、去る四月女子大學校御出身の才媛で、立派な淑女であらせらるゝ由、此上もない御良緣と存じ、誠意を捧げて御悅び申上げる次第であります。

此夫にして此妻を擁され、以て琴瑟相和し、膠漆の如くなれば御家門の榮えは日々に其光を增すこと必定と存じます。

最後に臨み、新郎新婦よ、この幸多き夕の婚禮を忘却せず、鴛鴦の契り睦まじく、何日までも〳〵榮え給はんことを祈ります。

一言以て今日の佳き日の御挨拶と致します。

同　（來賓總代より）

諸君。

この儀式は嚴肅であると同時に、又非常に愉快なるものであらねばなりません。

玆に同席の榮を賜つた花婿花嫁の君には、久しく苦樂を共にせられんが爲めに、今日の吉日を卜されて、偕老の契を結ばれたのであります。

希くば諸君よ、御兩人の前途ます〳〵光榮と幸福にして、千歲の壽を得られんことを御祈り下さい。

そして何某君と新夫人の健康と幸福のため滿をひいて乾杯されんことをお願ひします

諸君、同じ喜びを胸に抱ける諸君よ、吾々は永らく友人として御交際あらんことをも併せてお祈りする次第であります。

聊か祝辭を述べて御挨拶にかへます。

披露宴の末席から（主人側の謝辭）

唯今は不肖私と愚妻のために、鄭重且つ懇篤なる御祝詞を添けなう致しまして、眞に感謝の外はございません。衷心より御禮申上げます。

尙ほ又御懇篤なる御言葉に對しましても、一意專心、これに從ふやうに努力したい覺悟でございます。

本日は切角御光來を賜りましたが、何の設備もなく實に心苦しい次第で御座いますが、どうか御ゆつくり充分に歡を盡されて、幾久しく御厚情を、來賓諸君一同に心からお願ひいたしますと同時に、又愚妻に代りまして、お願ひする次第でございます。

言葉が足りませんが、ほんの一言謝辭を述べます。

諸届書式

養子縁組届

何府縣郡市區町村番地
戸主族稱職業　何　某　印
養父職業　何　生年月日
養母　たれ　生年月日
何府縣郡市區町村番地
戸主平民某弟（父ハ貳、參男、女）職業
養子　何　誰　生年月日
本籍　何府縣郡市區町村番地
右實父　何　誰　印
右實母　たれ　印
右養子縁組候間此段及御届候也
昭和　年　月　日

（養父）　何　某　印
（養母）　たれ　印
（養子）　何　誰　印
何府縣郡市區町村何番地戸主族稱職業
證人　何　誰　印　生年月日
（證人ハ二人以上必要ニツキ之レニ倣フテ列記スルコト）
市（區、町、村）長……殿
前記養子縁組ニ同意ヲ表ス
養子ノ父母（父又ハ母）　何　某　印
養子ノ戸主　何　某　印　生年月日

婚姻届

何府縣郡市區町村何番地
戸主族稱職業
夫　何　某　生年月日

右父職業何某
右母たれ長(貳)男

右婚姻候間(同意書ヲ別紙ニ作ル時ハ「婚姻同意書」相添ト記入スベシ)
此段及御届候也

昭和　年　月　日

届出人　夫　何　某　㊞
同　妻　た　れ　㊞

何府縣郡市區町村番地
戸主(又ハ戸主トノ續柄)族稱職業　何　某　㊞
生年月日

証人

(證人ハ貳人以上必要ニツキ此例ニ倣フテ列記スベシ)

市(區、町、村)長……殿

(男ハ滿三十年、女ハ滿二十五年前ニ在テハ保護者ノ同意ヲ要ス○同意書ハ別ニ作ルモ可ナル
モ婚姻届ニ奥書スル方簡便ナリ左ノ如シ)

前記婚姻ニ同意ス

夫　何某ノ父　何　某　㊞

同　母　た　れ　㊞　生年月日
妻たれノ父　何　某　㊞　生年月日
同　母　た　れ　㊞　生年月日

入夫婚姻届

何府縣郡市區町村番地
戸主族稱職業　妻　何ノたれ　生年月日

何府縣郡市區町村番地
戸主族稱職業

右父　何　某　生年月日　長女

右母　たれ　生年月日

何府縣郡市區町村番地

戸主族稱職業

夫　何　某　生年月日

本籍　何府縣郡市區町村番地

職業

右父　何　某　何男

右母　たれ

右入夫婚姻候間此段及御届候也

昭和　年　月　日

（妻）何　たれ㊞

（夫）何　某㊞

何府縣何郡何町何丁目何番地

戸主族稱職業　何　某㊞

証人

（證人ハ二人以上必要ニ附キ他ハ之レニ倣フテ列記ノコト）

市（區、町、村）長……殿

右入夫婚姻ニ同意ス

妻たれノ戸主又ハ夫何某ノ戸主

何　某㊞　生年月日

轉籍届

何府縣何郡町村何番地

戸主族稱職業　何　某　生年月日

妻た　生年月日れ

（他ニ家族アラバ列記スベシ）

轉籍地　何府縣郡市區町村何番地

右轉籍候間別紙戸籍謄本相添へ此段及御届候也

昭和　年　月　日

右

何　某㊞

市（區、町、村）長……殿

分家届

何府縣何郡市區町村何番地

戸主族稱職業　何　某

本家ノ戸主

何府縣何郡町村何番地

分家ノ戸主トナルベキ者

何々弟（妹）　何　生年月日誰

何府縣何郡町村何番地

戸主族稱職業　某

右父　何　れ　何男（女）

右母　た

分家ノ家族トナルベキ者何誰妻　た　生年月日れ

何府縣郡町村何番地

右父　何　某

右母　た　れ　何女

（分家ノ家族トナルベキ者他ニアラバ之レニ倣フテ列記ノコト）

分家所在地　何市何區何町何番地

右分家候間戸籍謄本相添へ此段及御届候也

昭和　年　月　日

右

市(區、町、村)長……殿　何　誰㊞

右分家ニ同意ス

何府縣何郡町村何番地

戸主　何　某㊞

生年月日

住所(居所)寄留届

寄留ノ時　昭和　年　月　日

「夫妻ノ一方ノミ寄留スル時ハ他ノ配偶者ノ名」

夫(又ハ妻)　何　某

(原寄留地)(寄留先ヨリ寄留スル時此項必要ナルモ然ラザル時ハ不要)

住所地　何府縣何郡市町村何番地

本籍　何府縣郡市區町村何番地

本籍ニ於ケル戸主又ハ戸主トノ續柄

華士族(平民ハ不要記)

世帶主又ハ世帶主トノ續柄、職業　氏名　生年月日

(寄留者、世帶主以下數名ナル時ハ本籍ニ於ケル戸主又ハ戸主トノ續柄、華士族、世帶主又ハ世帶主トノ續柄及ビ職業ヲ肩書シ氏名ト生年月日ヲ列記スル事)

右住所(居所)寄留及御届候也

昭和　年　月　日

届出人世帶主　何　某㊞

承諾者(家主又ハ家屋管理人)　何　某㊞

市(區、町、村)長……殿

復歸届

寄留地　何市何町何丁目何番地
本籍地　何府縣郡市區町村何番地
戸主(又ハ戸主トノ續柄)　何　某

(復歸者數名アル時ハ戸主ノ續柄ヲ肩書シ列記スルコト)

右復歸及御届候也

昭和　年　月　日

市(區、町、村)長……殿　右　何　某　㊞

退去届

退去ノ日　昭和　年　月　日
退去先　何市何町何番地(退去不明ノ時ハ不明ト記スコト)
住所(居所)寄留地　何市何町何丁目番地(誰方)
本籍　何府郡縣市區町村何番地

右退去及御届候也　退去者　何　某

昭和　年　月　日　届出人　何　某　㊞

市(區、町、村)長……殿

印鑑届

本籍　何市何區何町何丁目何番地
住所　何縣何郡何町何々何番地寄留
戸主(又ハ戸主某何男女)　何　某　生年月日

(前記ノ通リ記載シ且ツ調印セル附箋(幅曲尺一寸長サ同五寸)ヲ貼附シ差出スヲ要ス)

印鑑届

右及御届候也

昭和　年　月　日　屢出人　何　某　㊞

(地主又ハ家主若ハ差配人ノ連署ヲ要ス
○戸主ノ印鑑届濟ノ上ハ家族ノ印鑑届ニハ戸主ノ連署ノミニテ足ル)

市(區、町、村)長……殿

委任狀

拙者儀何市何町何丁目何番地何誰ヲ以テ代理人トシ左記權限ヲ委任ス

一 何々(委任事項ヲ記載スルコト)

一 (代理人ハ其都合ニ因リ復代理人ヲ選定スルコトヲ得)

右委任狀仍テ如件

昭和　年　月　日

何市何町何丁目何番地

何　某 ㊞

以下餘白

結婚禮式一切の知識 終

昭和三年十月十日印刷
昭和三年十月十三日發行

結婚禮式一切の智識
定價金九十錢

著者　家庭圖書刊行會
發行人　東京市下谷區坂本町三ノ三五　市川松之輔
印刷人　東京市下谷區入谷町三九六　金山佐次

發行所　東京市下谷區坂本町三ノ三五　電話下谷四七三七番　振替東京四六〇一九番　博進堂書店

(博進堂印刷所　印行)

不許復製

博進堂發兌

東山昌川著　獨習圖解　玉の撞き方　△定價金一圓廿錢　送料金十錢

中村八郎著　樂んで儲かる　飼鳥の秘訣　△定價金一圓廿錢　送料金八錢

寺岡實博著　必らず成功する　三定式養鷄法　△定價金一圓五錢　送料金十二錢

文學士　橋場秋悟著　模範作例　式辭と弔詞　△定價金一圓廿錢　送料金十錢

中村八郎著　趣味副業　小鳥飼方の實驗　△定價金一圓廿錢　送料金十錢

農業世界主筆　野崎信夫著　田園の伴侶　△定價金一圓廿錢　送料金十錢

千葉種畜場長　山根直正　牛馬　岡主寺岡實博著　菱鷄術　雛の育て方　△定價金一圓廿錢　送料金十錢

536
438